

地域の拠点を作り直すことの意味

「子ども食堂」は「子どもの食堂」ではない

「子ども食堂」という名を耳にしたことがある人は多いだろう。

それは、子どもの貧困や欠食、孤食といった問題のため、と理解されがちだ。もちろんそうした側面もあるが、機能はそれだけではない。

湯浅誠さんに聞いた。

増える！「子ども食堂」

——「子ども食堂」について湯浅さんの考えを聞かせてください。

「子ども食堂」は、ひとことで言えば、子どもが一人でも行ける無料、または低額の食堂です。「地域食堂」「みんなの食堂」と呼んでいるところもあり、民間発の自主的、自発的

な取り組みです。大半は、個人が集まってボランティアで運営されていますが、自治体などに申請して補助金を得るケースもあります。ただ、それで利益を出せるわけではありません。せいけんね。

個人のボランティアだけでなく、食材や資金は寄付を募ったり、団体や企業の協力があったりして運営されているところも多くあります。常

設できるところはまだまだ少なく、月に一回か二回の開催が多いですね。

——そういう活動は、お寺や自治会など、地域の拠点的な機能を持つところで運営されていたのではないのでしょうか。

従来はそうだったかもしれませんが、しかし、いまは地域と人々を結ぶ力はずいぶん弱くなってしまう。これは都市部だけでなく地方でも同

社会活動家

湯浅 誠

●ゆあさ・まこと 1969年東京生まれ。90年代からホームレス支援などに携わる。内閣府参与、法政大学教授を経て、現在、東京大学特任教授。著書に『ヒーローを待っている世界は変わらない』（朝日文庫）など。

様の状況といえます。子ども会に人が集まらないとか、年一回のお祭りを開催するのがやっととか、そういう地域が日本国中にあります。

敗戦後のこの国は、高度経済成長やバブルに沸いた時代、そしてバブル崩壊などがあり今日に至っていますが、一貫して地縁や人とのしがらみを捨て続けてきたように思います。地縁などというわずらわしさを捨て、気楽で効率のいい、とにかく便利な生活を追い求めてきた。ボタン一つ押せば、機械がなんでもやってくれるようなユートピアを思い描いてきた。そして、たしかにいまではたいいていのことが実現されました。本をはじめ、生活用品はネットで注文すれば、家から一步も出なくて手に入りますから。

でも人との会話がほとんどなく、それでも一人で生活していくのに困

らない暮らしは、果たして私たちが思い描いてきた明るい未来が実現した形なのでしょうか。あまりにも利便性を追求しすぎた結果、他者や地域との接点が極端に薄くなった姿は、想像していた明るい未来とは違っていると感じますね。

保育園が足りないので建設しようとしても、都市部では近隣からクレームが入る。自分の子どもや孫の声であれば騒音とは感じないだろうに、他人の子どもの声は騒音だと感じる——このようなエゴイズムの横行に、実は多くの人たちは「それはあんまりだ」と思い、そこまでできてしまった世の中への違和感を持ち始めたのではないのでしょうか。

加えて、地震や豪雨といった自然災害が、いともたやすく日常生活を破壊し、私たちの暮らしは、とても脆いものなのだと痛感させられてい

ます。暮らしが脆いうえに、他者や地域とのつながりが希薄なのでしたら、多くの人が危機感を募らせるのは当然だと思います。

だからこそ、地域の交流拠点を作り直したい、あるいはもうちょっと強めたいといったニーズが高まっているのでしょう。「こども食堂」が増え続けているのには、そういった背景があると思います（現在約三七〇〇カ所）。そうでないと、利益も出ない、時間と労力はけっこうかかる活動が、この不景気の時代に爆発的に増えていく説明が付きません。

——祭りのテントでお酒を飲んでいたのはおじいさんばかり。女性たちはお酌をして、忙しそう。そこに加わりたいかという……。地域の結びつきが弱くなったのは、こうした姿もあるんじゃないでしょうか。

まさに、その女性たちが中心とな

って立ち上げたのが「こども食堂」なんです。だから旧来とは違ったコミュニティの復活、地縁とのつながり方を新しく作ろうとしていると言えます。給食以外の一日の食事がバ

ナナ一本の子もいれば、塾や私立の中学校に通っていて晩ご飯は一人で食べている子もいます。前者は経済的な課題、後者は孤食という事情を抱えています。こうした状況に対し、福祉分野の人ではない、ふつうの人が、「ご飯を作って一緒に食べるくらいならできるよ」と手を上げ、体を動かしました。

根底には子どもの貧困問題もあるけれど、それだけじゃない。孤食や地縁とのつながりの希薄さをどうにかしたい、食を通じてじっくり話したい、地域の多様な人と交わりたい、といった気分が高まったのでしよう。他者との交流は人生を楽しく

するし、勇気づけられるからです。言ってみれば人生の選択肢を広げることになる。

そのためのとっつきやすい第一歩が、子どもも若者もお年寄りも一緒に食卓を囲む場、空間です。「こども食堂」の名づけ親は、東京・大田区で八百屋を営む近藤博子さんです。近藤さんは知り合いの校長先生から給食以外にまともに食事をとっていない子のエピソードを聞き、どうにかしたいと思っていた。しかし、その子は児童擁護施設に入所してしまった。そのような子たちが一人でも詮索されず、安心して食事ができる食堂を作ろう——そう思い立ったのが始まりです。

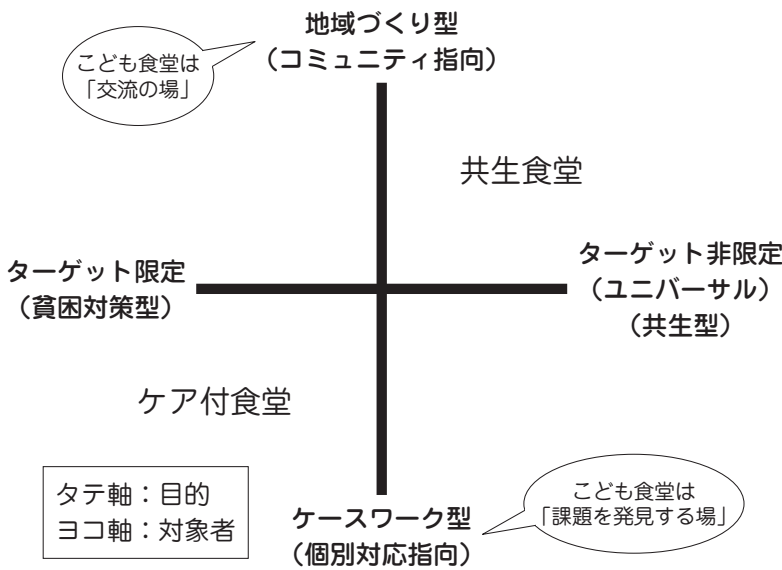
この食堂には「貧困問題」という限定はついていません。子どもだけの場所でもない。大事なのは、子どもが一人ぼっちで食事しなければなら

ない状況を防ぐための、年齢、性別、職業を問わない食堂であることです。いろいろな人に囲まれ、話をしたり聞いたりする「だんらん」を提供する場であることが重要なのです。一人暮らしの高齢者の食事会に子どもが参加すれば、それはもう「こども食堂」なんです。出発点は「貧困問題」ですが、実際は「オーブン型の多世代交流拠点」としての機能を担っているのです。

目標は小学校と同じ数

東京・港区で運営されている「こども食堂」の話ですが、平均所得が一千万円を超えるエリアで、一見「こども食堂」とは無縁に思われるかもしれません。しかし、この狙いは、孤食防止とコミュニケーションです。母親と子どもだけの食卓で

こども食堂の類型



出典：『「なんとかする」子どもの貧困』（湯浅誠著）から

画を立てている認知症カフェは、自治体の補助が出ているところが全体の約六割ですが、「こども食堂」は、行政や自治体が旗を振っているわけではないし、やったからといって儲かるわけでもない。「こども食堂」の関係者は、この取り組みだけで子どもや家庭を取り巻くすべての問題が解決できるとは思っていません。それでもできることはやっていきたい、という肌感覚がある

は、子どもがぐずったりすると、母親はついキツく当たってしまう。でも、みんなでワイワイ食べれば、こぼしてもOKだし、「ママもゆっくりにしていい」となる。子どもが私立の学校へ通うと、母親は地域のコミュニティから外れてしまいがちで、

ママ友ができてにくい。そうするとますます子どもだけ、母と子だけの食事になりやすいですね。ですから、「こども食堂」と一口に言っても、ターゲットを限定した貧困対策型もあれば、ターゲットを限定しない多世代交流型もあるので（図参照）。厚労省が推進計

るのだと思います。

——多世代交流拠点の場。それが多くの「こども食堂」の姿ですね。

そうです。貧困だけにとらわれると、子どもが行きづらくなるし、そうなったら本末転倒です。経済的な事情に対象を絞った、非開放型の「こども食堂」は、全体の二割から二割ではないでしょうか。

——もっと増えていきますか？

湯浅 目標は最低でも二万です。それは小学校と同じ数です。何かあったときにフラッと行ける場所であってほしい。普段から「食」でつながっていれば、気軽に声をかけられるし、話しやすいと思います。

——地域とのつながりについて、必要だけど、自分が関わるのは面倒くさいといった虫のいい立ち位置にいる人も少なくありません。

私の両親は昭和十一（一九三六）

年と昭和十六（一九四二）年生まれで、地方から上京し、東京で出会い、所帯を築いた核家族の第二世代です。

田舎の地縁から抜け出した共同保育所運動（＊）の世代ですね。第二世代である私は、かろうじて親たちが田舎の地縁の中で育ったことを見聞きして知っている程度です。私より下の第三世代が、地縁や地域社会と完全に切り離された世代でしょう。しかしこの世代が、地縁や地域社会と切り離された状態で子育てをするのは本当に大変で、このままではマズいと気づいた世代ではないでしょうか。その世代が「こども食堂」などのコミュニティ形成の一翼を担っています。

地縁から離脱した、あるいは離脱せざるを得なかった世代から、地縁を作り直すとする世代への循環。それも新しい要素を加えながらの循環です。そうした循環を繰り返し、世の中が進んでいつているように感じます。

「こども食堂」は農家

子育てもしていない、ママ友もない、PTAもやっていない、自治会の役員でもないし、犬の散歩つながらりでのご近所づきあいもない——子どもやペットがいかに地域や人をつないでいるかですね（笑）。最近では、自治会やお寺、神社などが、あらためて「こども食堂」のような包括的な居場所作りに取り組むケースが増えていきます。「本来は私らがやることだろう」と再認識してくれているようで、大いに期待しています。昔の地域共同体のような濃厚なつながりとは違う形で発展していくのではないのでしょうか。

それから期待するのは、社会インフラとしてのコンビニです。いまのコンビニは、昔の駄菓子屋、私の場合だとバイク屋ですが（笑）、子どもや青少年少女たちの、家でもない、学校でもない居場所として機能しているでしょう。ファミリーマートが「こども食堂」を始めると声を上げたとき、懸念の声もありました。「コンビニに子どもの見守りや福祉的対応ができるのか？」「オーナーやアルバイトに対する労働強化、強制ボランティアではないか？」という疑問です。

しかし私は、見守りに関してはすでにできていると考えています。子どもだけでなく、高齢者や障がい者も対象に、自治体と連携して「地域見守り協定」の類を結んでいる例は多数あります。福祉的対応については、既存の「こども食堂」の多くが

＊共同保育所運動 1950年代に、都市部の共働き核家族世帯が公立の保育所普及を目指し、共同保育に取り組んだ運動。

福祉分野の人たちではないという事実があります。民生委員や社会福祉士が始める場合もありますが、それは少数。多くは普通のおじちゃん、おばちゃんたちです。福祉的対応には公的サービスも含まれますが、子どもや人々のより良き暮らしを実現するのが目的だとすれば、それは本来、福祉畑で働いている人たちだけのものではないし、あつてはならないと思います。「こども食堂」は、「つながりの貧困」「心の貧困」に有効な手段であり、立派な福祉

祉的対応です。ファミマの「こども食堂」は、多世代交流型の地域拠点として運営されています。

私は常々「こども食堂」イコール農家だと説明することにしていました。一反の農地で大根だけを栽培している農家もあれば、三十町歩で米や野菜、果物も作っている農家だってあるでしょう。前者だけを指して、「これが農家だ」と言うことはできませんよね。いろんな形の農家があるように、「こども食堂」も多様な形がある。

ファミマの取り組みは、トップからの強制ではなく、オーナーの自発的な意思によるものです。強制的な労働でもボランティアでもありません。ファミマのような「誰もが知っている企業」が参加し運営してくれることで、「こども食堂」の知名度はさらに上がります。ほかの企業からは、「ファミマのおかげで、社会貢献の稟議が社内を通しやすくなった」という声を聞きます。影響力を持つ企業が動く。これは本当に大きなことだと思いますね。

●「芸術の科学」と「科学の芸術」を学ぼう

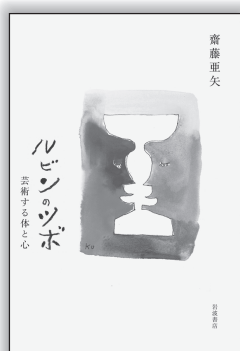
ルビンのツボ

芸術する
体と心

氏司孟老
推薦!

齋藤亜矢

芸術を生みだす心のしくみとは？ 砂遊び、骨折、片目の光を失った経験……。自身の体と体験をとおして考える。



四六判 本体1600円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

[定価は表示価格+税]

<http://www.iwanami.co.jp/>

■構成・編集部